

人文学会六十周年に想うこと

大 里 浩 秋

中国語学科開設を一年後に控えて神奈川大学に拾ってもらったのは一九八七年のこと、それからあつという間に二六年が経ち、来年度で定年を迎える年となった。この間神奈川大学内外の多くの人のお世話になり、愉快に仕事することが出来たのはとてもありがたいことであつた。そして思うのであるが、その長いようで短い間に時に知的興味を沸かせ、時に息抜きをするのに役立ったのは、人文学会の存在であつた。以下、人文学会にどんなお世話になったかをふり返り、併せて今後の学会への期待を述べることで、創立六十周年のお祝いの言葉に代えさせていたきたい。

言うまでもないことだが、人文学会の主要な取り組みとしては『人文研究』の発行と各種講演会の開催があり、これに学生部会の行事を加えた三つをいかに組み合わせるかに、毎年の常任委員会の苦心があつたと思う。私も神奈川大に来て数年後に、黒沢惟昭委員長と出来成訓委員長の下で二年間ずつ委員を担当して、縁の下の仕事を幾分かは味わつたが、その後はもっぱらお世話になる方に回って今に至つた。

ところで、私が一番ありがたく利用させてもらったのは、講演会の開催においてであった。人文学会設立五十周年を記念して発行された『人文研究』第一五〇号に載った、一九九七年から二〇〇二年までの講演会一覧と、『人文研究』総目録を見るだけでも、私がいかに積極的に講演会を開かせてもらったかが証明できる。試みに上記一覧と目録から取り出すと、以下のような講演会を実施したことになる。（講師の敬称略）

田中宏「日中復交二〇年と戦後補償問題」一八九三年、田中正俊「戦後生活のなかで戦争を考える―「学徒出陣」五十年によせて」九五年、李曉東「楊度と立憲君主制」、大久保明男「中国日裔青年の現状―中国残留孤児2世」、孫安石「朝鮮近代史から見た日中関係史」、馬興国「中国東北の日本文学研究」以上九七年、楊中美「中国の現状―朱鎔基登場を中心に」、早川秀樹「横浜の中国帰国者日本語教室の体験」、溝口雄三「物語としての中国思想史」以上九八年、王津「日中両国語同時通訳の授業を担当して」、片寄浩紀「中国関連企業就職心得」以上九九年、石田米子「日本軍の性暴力―中国山西省での調査で思うこと」、杉本孝「苦境を脱した朱鎔基―国有企業改革とWTO加盟をめぐる中国の対応」、矢野目直子「中国映画事情」、ロバート・イファード「中国帰国者の戦後処理―支援、責任と市民運動」、シンポジウム「21世紀、アジアの座標軸を求めて」Ⅰ、Ⅱ（尹健次、白永瑞、孫歌、砂山幸雄、高木喜孝、金敬得による報告）以上二〇〇〇年、嚴安生「日中比較文化研究を考える」二〇〇一年。

若かったこともあろう、中国史や日中関係、また日中関連企業への就職事情について、授業以外で学生と一

緒に学びたいと願ひ、機会を見つけては内外の研究者をお呼びして得意の研究内容を報告していただき、本学の卒業生にも日頃の研究や実践の成果を紹介してもらひ、さらには、講演に参加していい学生にも読ませたいと感じた講演内容をいくつか選んで、『人文研究』に載せてもらつたのもありがたいことであつた。田中宏（二一八号所収）、田中正俊（一二三号）、石田米子（一四四号）がそれにあたる。

人文学会の講演会を企画実施して深く印象に残っている一つに、一九九〇年十二月一日に開いた作家、駒田信二さんの講演「私の捕虜体験がある」がある。駒田さんの中国での捕虜経験については、その頃在籍しておられた尾上兼英先生から面白いよと伺っていたし、そのことについて簡単に記したご本人の文章も読んでいたので、是非直接に伺う機会をもちたいものだと思ひ、尾上先生の口添えで引き受けていただくことになった時は小躍りする思ひがし、当日は期待通りのお話を固唾を飲んでお聞きした。そして後日談になるのだが、日本租界があつた場所の調査で重慶を訪ねた機会に、駒田さんが捕虜として閉じ込められたあたりの街中の集合住宅を訪ね歩くことまでしたのであつた。お話があまりにも面白かつたので、駒田さんの許可を得て『人文研究』に載せてもらう手はずを整えていたところ、強敵現るで、小島晋治先生の紹介で講演を聞きに来ていた岩波書店の編集者がやはり駒田さんの経験を文章化しようと目論んでいて、あわよくば私たちが実施した講演内容を盗み取ろうと考へて駒田さんに話を持ちかけていることがわかつた。結果は岩波に盗み取られることになつた。その方がより多くの人に読んでもらえるだろうし、それが駒田さんの希望でもあると物わかりよく判断したからである。ここまで駒田さんの話された内容については、なにも触れないままで来たが、ぜひとも岩波ブックレットNo.214の駒田信二『私の中国捕虜体験』に目を通していただき、その文の最後に「神奈川大学

人文学会での講演に手を加えた」と断っているのを確認していただければと思う。

この駒田さんの講演を含めて、一九七〇年代から九〇年代にかけての多くの講演会記録が人文学会に残っていないようであるのは残念なことで、偶然であれどこからか発見されてまたの機会に『人文研究』に一覧を載せてもらえるとうれしい限りである。

約束の字数をとくに越えてしまったが、以下に少しだけ、『人文研究』にも大変お世話になったことを書かせていただきたい。私がそこに発表した文章は数篇に過ぎないけれども、上述の講演記録を三篇載せていただいたばかりか、中国語学科を退職された先生を記念する諸論文を載せた記念号を三度（第一一二号には那須清先生の、第一三五号には尾上兼英、小島晋治、松本昭三先生の、第一五五号には木山英雄先生の）出してもらい、さらに第一四五号には、中国語学科創立十周年を記念するシンポジウムの内容と学内共同助成研究の報告「戦前中国における日本租界の研究」の成果報告を載せていただいたのとはとてもありがたかった。第一四五号に載ったうちの後者は、その後非文字資料研究センターで今に継続している租界研究のはしりとなる成果の披露となった。『人文研究』についても、今後二〇〇三年の第一五一号以後の目録を一括して載せていただくならば、お世話になったことを一層思い出す機会になるだろう。

最後に、人文学会の今後の取り組みについてのいくつかの注文である。講演会については、各先生あるいは共同研究においてこれぞと考えついた内容で企画・実施されることは今までと同様であろうが、そうだとし

も、内側の必要にとどまらずに、外の空気を大いに吹き込むような刺激的な内容をそこに取り込んで自分たちの糧にするような企画を心掛けてほしい。そのことは『人文研究』の内容についてもいえることで、単に個人個人の論文を書き、その論文数を昇任人事に生かすというに留めずに、内外の共同研究の成果を発表する場としても活用してほしいと思う。その場合、この数年来私が考えているのは、『人文学研究所報』との棲み分けについてであるが、乏しい経験によれば、『所報』は主に人文学研究所のグループ研究の成果を発表する場とし、他方『人文研究』は、個人の成果を発表するだけでなく、その他もろもろの共同研究の成果を発表する場を目指すべきではないか、ということである。

六十年を迎えた人文学会の今後ますますの発展を心から祈るものである。